



園の研究の歩み

阿部明子

整理してみた。記録の内容としては視聴中の状況ならびに教師の指導経過を事前、視聴中、事後、発展、評価にかけて記録する。また視聴以前の問題として、画面の鮮明度や放送内容の程度、用語、技術についても記録する。昨年五月から十月までの記録を集計したものをひろってみると次のようである。

1、視聴した番組(略)

2、画面の鮮明度並びに電波の状況

本市は広島の中継局から約六〇軒離れた地にあり、遠隔なものと地形の関係で、非常に感度が悪い。そこでいかにして良い条件を整えて見せるかについて、二年

間工夫と努力を重ねた。最初は暗室で見せたり、途中で視聴を中止することも再々であったが、現在では明るい環境で快く視聴出来るようになった。

3、視聴中の状況並びに指導(第四表)

4、事後指導並びに発展(第五表)

5、放送内容(程度、用語、技術)(略)

このようにして受け入れた視聴内容を子どもたちはどのように消化して身にかけているであろうか。絵画表現を通じて実験考察を試み、興味ある結果を得ている。その点については「マス・コミと幼児教育」を参照されたい。

(広島大学付属幼稚園)

私もも創園以来八年、もう少し理由のつく保育がしたい、つまり科学的な裏付けのある保育でなければならぬと考え、日々、努力を重ねてまいりました。

まず私どもがとりあげたのは、保育する相手の子どもたちが、本質的にどのような子どもたちであるか、つまり、子どもたちを知らないで保育することは出来ないと考え、個人式知能テストを施行することでありました。無論、知能検査にもそれぞれの特長があり、欠点のあるのはわかっていたのですが、これほど一般化され標準化されたもの、すなわち、科学的な操作をもったものは、ほかに見当らず、はじめに取りあげたわけです。研究所へ足を運びテスト施行を参観させていただいて、施行者としての態度や技術を学び、それぞれの担任の子どもたちをテストいたしました。

個人個人に接してゆっくり観察したことから、子どもたちとの交流がスムーズになったのはいうまでもなく、日常かかれていた子どもたちの能力を見出したことが

たくさんありました。保育中消極的でちょっと目立ったところがない子に、思わぬ構成力を発見して驚いたり、最後まで考え通す態度を示されたり、逆に、平常はききき応答しているのに、見当はずれのおしゃべりがはじまったりあきやすかったり。こうして子どもたちを見る眼が変わったことは最大の収穫でありました。保育にプラスすることは勿論、後述のような研究の資料となった観察記録は、テストによって養われた客観的な、他と比較してみる眼が捉えているからこそ役立ついると思うのです。更に、種々なテストの特性と限界。それによって結果を分析してみることの重要性。算出されたI・Qよりも、テストの経過、態度、考え方などの観察が非常に参考になる。その欠点を補うような保育の方法、教材の考え方を工夫することが保育の課題であることなど、抱えきれないほどの問題を教えられました。これは「テスト施行に関する諸問題」。「WISC知能診断テストの結果」などの表題でまとめ、批判を仰ぐよ

う折あるごとに発表いたしました。

テストと併行して、保育内容から子どもたちの実態を把握する努力も怠っていたわけではありません。「幼児の好む色彩と性質について」「読譜出来る以前の音階の指導」「生活発表の構成と、品詞分析によって考察する」など、教諭各自がおのの分野で、しかも相互の協力によって研究をつづけ、発表もしました。発表するのは大きな負担ではありましたが、考察したことをわかるように伝えるための学習、個々の結果をまとめ、問題点をひき出してゆく、などの操作の習得は、私どもを進歩させたとも思います。今、筆を取って書けばたったこれだけのことも、毎日の保育と同時におこなうので約二年間の才月がかかっておりません。けれども、私どもの間に、こつこつやってゆけば保育に役立てることが出来る、やってゆくこうという気構えが出来てまいました。

そして、それが主題を発見させてゆきました。保育の結果が子どもたちに与える影

響を適確に知りたい、地域性がどのように子どもたちに表れているかを知らなくては……というふうになりました。幼児のためには決してよい環境ではない、あまりにも下町的な都会的な地域に育っている子どもたちが、どのような人間像を持っているだろうか。他地区の子どもと開きはないだろうか。これは知能検査では解決がつかまい。何とか子どもの姿をそのまま捉えたいという希望から、他の条件も併せ考えて、興味型テスト、性格評定テスト、音楽素質診断テスト、体力測定などを施行してみました。

その結果、子どもたちの能力的素質は、何ら環境の影響を受けていないことがわかりました。例えば、騒音の中の生活、数多い乗物の音、小工場の機械音、ラジオ、テレビ、広告放送という具合に、これ以上うるさい所は珍らしいほどの中に育ち、どうもリズム表現が出来ない、しょつ中などっている傾向がある子どもたちでしたが、音楽素質テストの結果は決して他地区の子ど

もに劣ってはおらず、かえって優秀な素質を持つている子が数名みられたのでした。

これらの素質が素直にあるがままに表れてこないのはなぜでしょうか。そこに環境の与える影響があるように感ぜられます。体力にしても、他の項目は標準に近く、またはそれ以上の力があるのに、懸垂力だけが一段と低いのです。依頼心が強い、粘りがない、おとなっぽいことばを使用しているがそれに伴った思考力が欠けている、などの性質は、ビルの中で年寄りや手伝いの方と過ぐす一日、反対に小学生や中学生の方から、つまり、環境から生じてくると思えます。そこに素質をそのまま伸ばし得ない原因があるのではないのでしょうか。そして、表現力の問題が出てまいります。最も表現力を把握しやすい生活発表表の内容や文章構成の良否の差は、何の関係で生ずるのか。これも結局知能の優劣ではなく、社会性に基因することが判然といたしました。この研究には、保育学会において第一回、

第一号の倉橋賞が与えられ、私どもは一層励まされたのでした。

こうして私どもは、幼児の教育は技術の修練や知識の習得にその目標があるのではなく、集団の中において、子どもたちの性格を望ましいものにしてゆくことにあるという確信をもつことが出来たのでした。これは自明の理であるかもしれませんが、保育技術を主として教えられた私どもが、自分たちの手で教育の根本目標をつかみ得たことは何よりの喜びであり、ゆるぎない信念となりました。

そこで発達を主体とした三年保育に対する年間保育計画を樹てたのであります。生活目標を基盤とし、健康、言語にはじまって、自由遊びを含めた総合に終る九項目を縦軸、発達の特性、教育目標、指導との留意点を横軸とし、研究と保育の実際を結ぶ第一の段階をなし遂げたのでした。

さてこうして発達をとらえてみますと、発達の差を考えないわけにはいかなくなりしました。「早生まれ児と遅生まれ児の差」

「二年保育児と三年保育児の差」知能テストにおける男女の発達差」を考察してみました。これらの結果も、前項と同様能力上の差はほとんどみられず、また、みられても保育を終る最後の日にはずいぶんちぢめられているのです。しかしながら現実の子どもたちには、はつきりと差がついております。その差の原因、姿の違いをとらえたいと考えて、一昨年から各個人の行動、すなわちどんな様相で保育に適應してゆくかを主眼として種々な場面を観察、毎日記録してきました。これと併行して、最近二年間の保育日誌を分析保育内容による各月、各級ごとの行動の変化を整理してみました。そして、集団の中における各個の姿をとらえ、集団としての子どもたちの動きをつかんでみております。この整理がつかんと、保育効果がどのような面に最も表われるか、それによって保育の方法を變化させ、發展させてゆく方向づけが出来るのではないかと考えております。

今後、この結果を考察してゆくこと、更

に個人からすすみ、小グループの行動の観察、保育者の働きかけに対する反応を観察記録してゆくなど、まだまだ大切な課題が山と残っていると思います。

また私どもの園は仏教主義の園であり、保育のなかで宗教心を芽ばえさせ、身近かな問題として取上げるような考慮をしております。ともすればおとなの考えによる無理な宗教観、型式的な儀礼のおしつけになつてしまうのですが、そのあやまちをおかさなためにも、やはり面接、質問や絵画による幼児の神仏観の調査もつづけております。宗教教育・道徳教育につながるものとして考えなければならぬ問題ですが、かといつて科学的な裏付けのない無理な精神

三、四才児の混合にあたって

の束縛であつてはならないと思ひます。それらの研究内容は機会あることに発表しておりますので、御存知の方もありません。以上、当園の研究の経過をたどつて書き綴つてみました。八年の月日が経つ間には教諭の中にも結婚による退職など何度か変化がありました。しかし新しく加つた人たちも、いつの間にか先輩の残していったものを引きついで、それを育ててゆこうとしております。これが私どもの園風なのでしょう。か。たいしたことではなくても、現場から身近かな問題をとらえて研究してゆくことは、保育の眼を積み重ねてゆく上でもやはり大切なのだと考えております。

(東京・神田寺幼稚園)

杉 山 守 代

最近、社会一般に三年保育が重要視されているので、私どもの園でも近距離から通園出来る希望者のみ(八名試験的に扱つてみることにした。ところで三才児のみの組が出来れば理想的であるが、部屋の都合でそうもいかず、二年保育(十二月〜三月生)との混合組を編成した。その結果三年児の父兄からは別にこれという意見も出なかつたが、二年児の父兄からは次のような意見が出された。

(イ)うちの子は早うまれで身体も小さく、どことなく弱々しいから、ちょうどよかった。

(ロ)幼児語でハッキリしないし気も小さい方だから少人数の組でよかった。

その反面、

(ハ)三年児といっしょのとり扱いをされては因るとハッキリ申し出る父兄もあつた。確かに三年児は、一見してわかるほど身体体格好も動作も、赤ちゃんの域を脱しない状態も見られるので、四才児の父兄からの意見が出るのも、当然と思われた。